



各事業所やフロアーに掲示

永 寿 会 通 信

黄色い飛行船 第7号

2015年 11月24日

40年前の事件「三島由紀夫と森田必勝」自衛隊乱入・割腹事件から今日（こんにち）へ。

1975年11月25日、東京市ヶ谷の自衛隊駐屯地で、「自衛隊治安出動と国軍化、憲法改正」を旗頭に、益田東部方面総監の監禁と隊員への決起扇動の暴走があり、失敗するや三島と森田が割腹するという事件が起こっています。

当時は楯の会のメンバーが自衛隊に体験入隊したともあってか、自衛隊内にも事件までこの構想について協議の場に10人ほどが登場していたようです。最終的には離れて、加わりませんでした。楯の会のメンバーからは3人が選抜され、押し入り、先述の様になりました。非常に悲惨で衝撃的な事件で、私には未だに印象に残っております。割腹といっても最終的にはメンバーの一人で剣道居合の経験者であった古賀浩靖会員が介錯して果てています。

作家である三島由紀夫も作品「金閣寺」や「仮面の告白」等で有名ですが、文学的行き詰まりもあったかと推察するところです。

また、首謀者の森田氏は学生時代から知っていました。三重県四日市の出身で、同じ大学の同学部で年齢は1歳上でしたが二浪しており、すぐ下の学年に在籍しておりました。当時から胆力があると同級生の後輩からは評価されており、立場は学内の右派の先鋭的中核な存在でしたので、左派のメンバーも一目置いていたようです。学内の「学生連盟」という組織から全国版の日本学生同盟のへと昇りつめています。そして私が卒業してからは三島由紀夫が主宰する「祖国防衛隊」から後身の「楯の会」（中核会員40名）の中心者になっており、事件を三島と共に扇動したことになります。今から見ると背筋が寒くなるように思いますが、現在の自衛隊や右派勢力の跋扈の時代背景の端緒を開いたのではと感じます。

そして不思議に思うのは、戦前ではなく、昭和46年に立正大学海南高校玄関前に「三島由紀夫・森田必勝烈士顕彰碑」建立され、平成12年には三重県四日市市に銅像が立っていることです。こうした点を結んでいくと、今年、戦争ができる国を目指し、安保法制を巡って世相が揺れましたが、何か気脈が通じてしまっているようで仕方ありません。

また、40年前の事件は奇異に見えましたが、シリアやイラク、アフリカで無人爆撃機からテロ組織の施設だとみなされ、ミサイル攻撃されている映像が映し出されると奇異ではないのが不思議です。わたしはその映像を見る度、昭和20年の東京大空襲や広島、長崎の原爆投下のこともダブります。爆撃される方は地上から飛行機を見上げているのです。報道ニュースステーションで古館伊知郎氏がコメントしていた「誤爆で市民が死傷していたらそれもテロでは」の言葉が事の本筋を言い当てているように思います。もっと暗然とするのはその該当飛行機はるか遠くの快適なビルの指令室から操縦されていることです。何か嫌な気分になります。職員の皆さんはどう思われますか？

以 上